

テーマ展をふりかえる



▲ ポスター・チラシ ▼ チラシ裏面



ナベ調理のはじまり▶
縄文時代はナベ料理が中心



◀ナベとしての縄文土器
湯を沸かし食材を煮る道具

カマド、それはコンロのはじまり▶
5世紀、キッチンは壁ぎわに



◀饗宴用の土器は、もてなし料理のはじまり
貴族の饗宴が会席料理の原形

囲炉裏は、「コタツにナベ」のはじまり▶
12世紀から囲炉裏のナベ生活復活



ユネスコの世界無形文化遺産に登録された「和食；日本人の伝統的な食文化」。この日本の料理の原点は、今から16,000年前の縄文土器の誕生までさかのぼります。

テーマ展では、発掘によって分かった食生活の歴史を紐とき解き、私たちの日本食文化がどのように形づくられてきたかを、模型と出土した土器を使用し、分かりやすくお伝えする企画展示を行いました。

🌸 展示室は無料で公開中です 🌸

団体見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは

ホームページ <http://www.maibun.or.jp>

をご覧ください

TEL 0285-44-8441 (代表) FAX 0285-43-1972

休館日 土曜日・祝祭日 臨時休館はHPをご覧ください



栃木県埋蔵文化財センターだより

CONTENTS

- とちぎ発掘イッピン図鑑 (1)
- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
あがた駅南遺跡 (足利市) (2)
- 西高橋遺跡 (小山市) (3)
- 平出城跡 (宇都宮市) (6)

- 市町が実施した発掘調査から
壬生愛宕塚古墳 (壬生町) (4)
- 大学が実施した発掘調査から
中根八幡遺跡 (栃木市) 國學院大學栃木短期大学 (5)
- 思い出の遺跡 湯坂 袋状土坑事始め 海老原郁雄 (7)
- テーマ展をふりかえる (8)

2020
9月

発行 令和2 (2020) 年9月15日
栃木県教育委員会
宇都宮市埴田1-1-20
電話 028-623-3425
編集 (公財) とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441 (代表)
FAX 0285-43-1972
休館日 土曜日・祝祭日・年末年始
URL <http://www.maibun.or.jp>

とちぎ澄まされた 古墳時代の銅鍬



とちぎ発掘イッピン図鑑

あがた駅南遺跡(足利市)から出土した、青銅製のやじり(矢の先の部分)です。
河川の氾濫によって堆積したとみられる土層から出土しました。形の特徴などから古墳時代前期(1700年前頃)の儀器(儀礼用具)と考えられます。
全長約 5.93 cm。目の当たりにすると小さいですが、やじりに見合う大きさです。
令和の今も研ぎ澄まされた光を湛える「イッピン」です。

(実際の鍬身の部分の大きさは長さ約 3.95 cm・幅約 1.67 cm・厚さ 0.51 cm・重さ 10.78 g)

撮影：小川忠博

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
あがた駅南遺跡（足利市）

東武鉄道伊勢崎線あがた駅の南側にあります。平成 28（2016）年 9 月～平成 30（2018）年 3 月まで、工業団地造成にさきがけ、発掘調査を行いました。縄文時代から近世までという、とても長い期間、人々が暮らした場所だったことがわかりました。



古墳時代前期～中期（1700～1500 年前）は、この遺跡でもっとも多く住居跡が作られた時代です。四角形や長方形の竪穴住居跡が 78 軒もあったほか、土器やマツリに使った道具（石製祭具）がまとまって出土する場所が 120 ヶ所以上確認されました。

掘立柱建物跡は 1 棟だけで、これは特別な儀式に使われたものと考えられます。柱は 6 本あり、それぞれ一本ずつ大きな四角い穴の中に据え付けられています。穴の中には柱の一部らしい木の破片が腐らずに残っていて、この木



掘立柱建物跡の柱穴。中央の丸いくぼみの中に当時の柱の一部が残っています

を調査したところ樹種は「桑」と判明しました。桑の木は重くて硬いため加工は難しいのですが、木目がきれいでとても丈夫です。わざわざこうした木を選んでいることからみても、この掘立柱建物があがたの地に暮らした古墳時代人にとっていかに大切だったかがうかがえますね。



土器や石製祭具はマツリに使われたと考えられます



住居跡から出土した台の付いた土器

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
西高椅遺跡（小山市）



墓穴（東主体部）と土器



91 号墳

上流（北側）

田川



西高椅遺跡の古墳群 令和元（2019）年度までの 3 年間で、99 基の古墳の整理作業を行いました。

91 号墳の整理作業から



91 号墳は約 1550 年前の円墳で、径約 33m です

91 号墳の埴輪には、筒の形をした「円筒埴輪」と、上の部分が朝顔のように開く形をした「朝顔形埴輪」があります。埴輪に含まれる元素の量を調べた結果、田川の上流である宇都宮地域で作られた可能性があります。



記号

半円の孔



記号

半円の孔

91 号墳の朝顔形埴輪

朝顔のような形は「壺」と考えられています



刻んだ記号

半円の孔

91 号墳の円筒埴輪



壺がとれた痕

こもちつば 須恵器の子持壺

91 号墳で出土しました。古墳より新しい時期の遺物なので、周辺の古墳から流れこんだ破片かもしれません。



〈参考〉
京都府
おおえやま
大枝山
22 号墳

0 20cm

市町が実施した発掘調査から
壬生愛宕塚古墳（壬生町）

壬生愛宕塚古墳は町の中央部を南流する黒川東岸の台地上に築かれた全長 82mを有する前方後円墳です。周辺には同墳に続いて築かれた牛塚古墳や、古墳時代終末期における国内最大級の車塚古墳が築されました。

壬生愛宕塚古墳の発掘調査は平成 29（2017）年度、平成 30（2018）年度に、茨城大学と東京学芸大学の学生が中心となり行われました。周堤の外側に二重目の周溝を確認するとともに、発掘調査の結果次のようなことがわかりました。



現在の古墳の様子

1 墳丘を覆う川原石（葺石）

調査が行われる前までは、本墳は葺石が無い古墳として知られていました。しかし調査の結果、墳丘の二段目の斜面には川原石を積み上げた葺石の施設があることが判明しました。江戸時代の絵図には本墳を「岩登」と表現しているものもあります。

2 規格の異なる円筒埴輪

愛宕塚古墳からは、周堤上及び墳丘第一段平坦面、そして墳頂部から埴輪列が確認されています。とくに周堤上の円筒埴輪は高さが約 80 cm、直径が 40 cm、4 条突帯の大型の埴輪でした。これに対し、墳丘上の円筒埴輪は高さが約 60 cm、直径が 30 cm、3 条突帯の小型の埴輪でした。このように愛宕塚古墳の円筒埴輪列は並べられた場所により規格の異なる円筒埴輪が立てられていたことが判明しました。



上：葺石の様子
右：大きさの違う円筒埴輪



盾持ち人を含む円筒埴輪列

3 古墳を守る「盾持ち人埴輪」

周堤上の円筒埴輪列からは、盾の上部に人の顔が表現された「盾持ち人埴輪」と称される特殊な埴輪が 4 個体確認されました。また過去の調査例から、顔が古墳の外側を向いていることもわかっています。盾を持ち、怖い顔が表現された「盾持ち人埴輪」は、古墳に葬られた人物の魂を守っていると考えられています。

この他、墳頂部からは家、大刀、翳などの形象埴輪が、周堤上からは挂甲をまとった武人埴輪や人物埴輪の破片が出土しました。今回の調査からは石室の位置を確認することはできませんでした。

（資料・写真提供 壬生町教育委員会）

大学が実施した発掘調査から
中根八幡遺跡（栃木市）

國學院大學栃木短期大学と奈良大学は、縄文時代後・晩期（今から 4000～2000 年前頃）の特徴的な集落形態である「環状盛土遺構」がどのように形成されたかを探るため、平成 27（2015）年度から、合同で学術発掘調査を実施しています。

これまでに湧水池に面した西側斜面で 1 m 以上にもなる盛土を調査してきました。ここでは最も下に堆積しているはずの関東ローム層が、縄文時代後期に堆積した黒色土の上に厚さ 30cm 以上も盛土された様子を確認しています。中から出土した土器から、この遺跡の終焉直前の縄文時代晩期中葉（今から 2800 年前頃）に盛土が行われたようです。

平成 30（2018）年度からは、東側の最も高い部分の発掘を始めました。

こちら側にも晩期中葉の関東ローム層の盛土がみられると予想していたのですが、発掘を始めてすぐに、縄文時代後期後葉（今から 3400 年前頃）の土坑や柱穴が多数発見されました。調査範囲が狭く、詳細はわかりませんが、これらの下に後期初頭～前葉（今から 4200 年前頃）、さらに中期後葉（今から 4700 年前頃）と時期の異なる遺構が累積していることも確認しています。また、西側に比べてももとの地形も東側は高かったこともわかりました。つまり、縄文人は、もともと低かった西側に厚く盛土した一方、東側には盛土は行わなかったか、あるいは盛土を行っていたとしても、その後削平されてしまった可能性が出てきました。いずれにしても、この場所で長期間にわたって生活が営まれていたことが明らかになりました。

令和元（2019）年度の新発見資料を紹介しましょう。1 つは後期初頭の埋設土器です。中から骨片が出土しているので



←注口土器を掘り出した様子 ↑東側調査区で確認された土坑や柱穴の様子



イヌかな？トリかな？

土器棺の可能性もある大きな土器ですが、実はあまり知られていない文様です。2 つ目は後期後葉の土坑から、下半部だけが逆位で出土したものです。貼瘤の存在から東北地方の影響を受けた注口土器と考えられます。3 つ目は、動物形土製品または土器につく動物形象突起です。イヌまたはトリの可能性を考えているところです。

（資料・写真提供 中根八幡遺跡学術発掘調査団）



現地調査の後には遺物整理作業
学生さん、がんばる！



土器棺の可能性のある埋設土器

湯坂 袋状土坑事始め

海老原 郁雄

昭和32年10月、大田原市湯坂遺跡の発掘現場。雑
木林の隙間にまるで開墾したような長さ30mのト
レンチに午前の秋の陽射しがいっぱいに降りそそ
いでいる。トレンチ中央の「落ち込み」(大穴)は毎日
に深さと広がりを増し、中から続々と縄文中期土器
の大破片が出土した。湿った赤褐色の器面に綺羅
星のごとき金雲母のきらめき。我知らず見入った。

発掘調査は日本考古学協会員・渡辺龍瑞氏が担
当者となり、9日間実施。宇都宮大学・辰巳四郎助
教授が率いる歴史研究会学生8名とOB塙静夫氏、
國學院大学の学生澤四郎・栗原文蔵氏らが参加し
た。調査には地方の湯坂集落が全面協力、青年団員
が労作業、宿舎には婦人会の賄い付きで公民館を提
供、各戸に調査員たちの入浴まで配慮下さった。

那須野が原扇状地には洪積面が河川侵食を受け
たので、各流路に沿って細長い残丘が点列してい
る。その残丘の一つ「白旗丘陵」に湯坂遺跡は立地し
ている。発掘のきっかけは湯坂集落から丘陵を横断
する市道の改良工事。切通しによる拡幅作業で大量
の遺物が出土して里人の猛然たる関心を喚起した。
地区役員の新江元吉氏らが市長に要請、遺跡発掘が
実現した。

「この穴は何だろうか」、渡辺・辰巳両先生は悩む。
訝しき湯坂の大穴は深さ2.8m、穴底は平らに広
がり、直径2.5mにもなり、二人が入り作業する。大量
の土器と共に、石器片、ク
リ・クルミなどの木の実
や炭化片を含む焼土など
も出土した。これらが意味
する大穴の用途は何なの
か。土器を保管したのだろ
うか、何かの供献なのか、
それともー

前例がないこの大穴は、もう一つの問題提起をし
た、それは27個体にも及ぶ土器群の中に含まれる、
阿玉台式とも加曽利E式ともつかぬ数点の深鉢の
存在だった。この土器たちは把手や胴部の渦巻文の
沈線に「結節」を加
飾し、施文の方法
が、あたかも、両者
の土器の折衷のよ
うに映える。新た



大穴から出土した
縄文土器



大穴(5区)上面の切株を除く
左端：筆者

な土器の認識であった。

大穴はやがて「袋状土坑」と呼ばれ、北関東の縄文
文化の研究に大きな刺激と展望を開いた。かくて、
〈湯坂の大穴〉は「袋状土坑事始め」に位置したので
ある。

その年末、龍瑞住職の専称寺に泊まり込み、土器
を洗った。夕餉に奥様の心尽くしのすき焼きの旨か
ったこと。朝な夕な厳しさを
増してゆく伊王野の山野の
寒さと共に
思い出される。

大穴出土の土器を見なが
ら考える。

縄文土器の編年型式には
南関東の遺跡名ばかりが冠
されている。栃木は研究対象
にならずにきたのか、南関東
とすべて同列

「折衷的な土器は彼方の大木式と係わりが有るの
ではないか、漠然たる思いが広がり始めた。

海老原郁雄 昭和12年3月生まれ。当センターの前身
(財)栃木県文化振興事業団調査課長。元栃木
県考古学会会長、現顧問。平成30年度瑞宝双光
章受章。現在も第一線で活躍する考古学者。

宇都宮大学歴史研究会学生
中央腕組み：筆者 撮影：当時の学生富永氏
湯坂遺跡にて 昭和32年10月

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から

平出城跡 (宇都宮市)

貞観三年(1209)年に宇都宮朝綱の家臣が築いたと見られる城
館跡です。整理作業の結果、主体となるのは15～16世紀で、厩(馬
小屋)と推定される建物跡があることがわかりました。今回は、厩
と推定した理由をご紹介します。

平出城の周辺には、城の名残を伝える屋号(その家の特徴を表す
呼び名)が残っています。現在の屋号・馬場(ばんば)さんの東隣
にこの建物跡と広場がみつかりました。南北に長く(約22m)、間
仕切りの間隔から「厩と馬場(ばば)だ!」とピンとききました。

厩は2棟並び。堀を挟んで、建て替えが行われたようです。間仕
切りから、2棟あわせて20頭前後が飼育できることがわかりまし
た。常設の厩であるのか、臨時的な厩(駐屯地)等であるのかは明
らかにできませんでしたが、騎馬武者20人、その下に10人の足
軽がいたとして、200人規模の城となることが想定できます。

鬼怒川右岸に展開する宇都宮氏の支城群(石井城・桑島城・刑部
城)の最北にあり、防衛戦では中規模とされる平出城の実態は、宇
都宮氏の戦術を考える上で重要です。厩の確認から解明される史実は少なくないでしょう。



堀の上(北)に2棟(白線部分)と
広場 堀の下(南)に2棟がみつかりました16世紀代の古文書の記載
から南側が新しいようです

袋状土坑

入口が小さく、底が広がった形の穴。断面形が巾袋
に似ていることに由来する用語。木の実などの貯蔵
穴と推定される。この形状が考古学的に認識される
のは、昭和40年(一九六五年)の矢板市坊山遺跡の発
掘調査である。

トレンチ
阿玉台式
縄文時代中期前半(今から5100年前頃)の土器。
関東地方東部から北部を中心に出土。

加曽利E式 縄文時代中期後半(今から4800年前頃)の土器。関東地方を中心に出土。



阿玉台式



加曽利E式



大木式



袋状土坑
(益子町御霊前遺跡)

把持
結節
細い笹(竹)を押したり引いたりして付けた文
様。

編年型式
「型式」とは、時期や地域によって異なる、土
器の特徴。「編年」とは、「型式」による土器
の年代の時間的尺度。

大木式
東北地方中部から南部を中心に出土。

渡辺龍瑞
大正3年3月生まれ。那須町伊王野専称寺
住職。県内初の日本考古学協会員。栃木県考
古学会初代副会長。

辰巳四郎
本県の考古学黎明期を支えた考古学者。

明治34年1月生まれ。宇都宮大学教授。
栃木県考古学会初代会長。本県の考古学の発展を担った考古学者。



渡辺龍瑞先生ご一家
専称寺にて
(昭和32年末)



結節



結節を復元する